

歌舞伎「勸進帳」の背景

－「杖で打たれる」ということ－

神田 由築

1. 歌舞伎「勸進帳」

「勸進帳（かんじんちょう）」は、天保 11(1840)年の初演である。七代目市川團十郎が能「安宅（あたか）」を歌舞伎化したもので、市川家の家の芸（歌舞伎十八番）の代表的な作品として、今日でも人気が高い。能に憧れた七代目團十郎が、それまでにあった「勸進帳」の原型のようなものを全面的に改めて、より「安宅」に近い形に作り直したとされる。そのため、台詞も「安宅」と重なる部分が多い。今回の講義では、「勸進帳」を紹介しながら、その背景にある日本の近世社会の精神的風土について考察し、あわせて同時代の朝鮮との相違にも言及してみたい。

まず、「勸進帳」のあらすじを紹介しよう。時は鎌倉時代。平家討伐ののち、兄の源頼朝（みなもとのよりとも）と不仲になった義経（よしつね）は奥州に落ちのびようとするが、諸国の関所は、頼朝の命によって厳重に固められている。義経一行は山伏に変装して、加賀国安宅関にさしかかる。関守・富樫左衛門（とがしさえもん）に厳しく詮議され、たびたび窮地に陥る一行だが、弁慶（べんけい）の機知によってやがて無事に関所を通り抜ける。

勸進帳とは、寺社建立などの寄付を募る趣旨を記した帳面のことである。義経一行は、“東大寺再建のための勸進を行う山伏”に偽装して関所を通ろうとする。頼朝に追われた義経が奥州に落ちのびたという事実とともに、当時、平重衡によって焼き払われた東大寺を再建するために、俊乗坊重源の主導のもとで実際に多くの勸進行為が行われたという時代背景をも、うまく取り入れた筋立てになっている。

この演目が今日でも人気を得ているのは、物語が全体的に緊迫感に富み、しかも、いくつかのクライマックスシーンが用意され、高まる緊張の中でドラマを満喫することができるためであろう。

物語のクライマックスは、①東大寺再建の勸進山伏を装うため、弁慶が偽の「勸進帳」を読み、さらに富樫が弁慶に山伏問答を挑んで両者が激しくぶつ

かりあう場面と、②関所を抜けようとして富樫に見咎められた義経を弁慶が断腸の思いで杖で打ち、それを見た富樫が、眼前の人物が義経であることを承知しながら関所を通す場面（この時、富樫は切腹する覚悟であるとされる）と、③無事に関所を通過したのち、主君を打った申し訳なさに平伏する弁慶へ義経が優しく声をかける場面と、大きく三つあげられる。

ここで注目したいのは、②から③の場面にかけてである。それぞれの場면을抄録しよう。（「勸進帳」『日本古典文学大系 98 歌舞伎十八番集』岩波書店、1965年、仮名遣いなど改め、省略したところがある）

長唄「金剛杖をおっ取って、さんざんに打擲（ちょうちやく）す」

（弁慶側と富樫側の詰め寄りがある）

弁慶「御疑念晴らし、打ち殺し見せ申さん」

富樫「早まり給うな、番卒どものよしなき僻目（ひがめ）より、判官どのにもなき人を、疑えばこそ、かく折檻（せつかん）も仕給うなれ。今は疑い晴れ申した。とくとく誘（いざな）い通られよ」

（関所を通り抜けて）

義経「いかに弁慶、さても今日の気転（きてん）、さらに凡慮（ぼんりょ）の及ぶ所にあらず、兎角（とかく）の是非を争（あらそ）わずして、たゞ下人（げにん）の如くさんざんに、我れを打って助けしは、正（まさ）に、天の加護、弓矢正八幡（しょうはちまん）の神慮と思えば、かたじけなく思うぞよ」

（他の従者たちの台詞がある）

弁慶「計略とは申しながら、正しき主君を打擲、天罰（てんばつ）そら恐ろしく、千鈞（せんきん）を上ぐるそれがし、腕も痺（しび）るゝ如く覚え候。あら、勿体

(もったい) なや勿体なや」

これらのシーンは、それぞれ弁慶の智恵と忠節、富樫の理知と情け、義経の気品と弁慶に対する深い愛情を描いており、物語のクライマックスであると同時に、三人の主要登場人物（あるいはそれを演じる役者）の魅力を十分に感じさせてくれる名場面でもある。さらに、これらの場面を注意してみると、いずれも弁慶がとった義経を「杖で打つ」という行為が中核にあることに気付く。すなわち、「勸進帳」とは（とくに後半部分は）、義経（主君）を弁慶（家来）が「杖で打つ」行為をめぐる三人の思惑のドラマなのである。

2. 能「安宅」

この「杖で打つ」行為は、先行作品の「安宅（あたか）」ではどのように表現されるのだろうか。これにあたる場面を引用してみよう。（「安宅」『日本古典文学大系 41 謡曲集下』岩波書店、1963年、仮名遣いなど改め、省略したところがある）

弁慶「いで物見せてくれん」とて、持ちたる杖をお取って散々（さんざん）に打擲す（弁慶側と富樫側の詰め寄りがあつて）

富樫「近頃（ちかごろ）誤（あやま）り申して候、はやはやおん通り候え」

（関所を通り抜けて）

弁慶「さても只今（ただいま）はあまりに難儀（なんぎ）に候いしほどに、不思議の働きを仕り候こと、これと申すに君（きみ）のご運尽きさせ給うにより、今弁慶が杖にも当たらせ給うと思えば、いよいよあさましうこそ候え」

義経「いかに弁慶、さても只今の機転さらに凡慮よりなす業（わざ）にあらず、ただ天のおん加護（かご）とこそ思え」

「ただまことの下人（げにん）のごとく、散々に打ってわれを助くる、これ弁慶が謀（はか）り事（こと）にあらず、八幡のご託宣（たくせん）かと思えば、かたじけなくぞ覚（おぼ）ゆる」

以上の引用部分を「勸進帳」と比較すると、「勸進帳」にほぼそのまま踏襲された部分と、「勸進帳」で新たに付け加えられた部分があることがわかる。

弁慶「御疑念晴らし、打ち殺し見せ申さん」

富樫「早まり給うな、番卒どものよしなき僻目

より、判官どのにもなき人を、疑えばこそ、かく折檻も仕給うなれ」

の部分は、いずれも「勸進帳」で新たに加えられたものである。ただし、二川清氏の『『勸進帳』の型の問題点』（『歌舞伎』27、2001年）によれば、この富樫の台詞は天保11年の初演にはなく、嘉永2(1849)年の再演時に付加されたものである。（この他、二川氏は「安宅」とも比較して富樫の人物造型について論じているが、富樫は弁慶の打擲に“感動して”義経を見逃したと解釈しており、「杖で打たれる」ことの本質には迫りきれていない。その点は、二川氏の批判する渡辺保氏の『勸進帳』ちくま新書、1995年も同じである。）

また、関所を通ったのちの弁慶の台詞も、「安宅」では「今弁慶が杖にも当たらせ給うと思えば、いよいよあさましうこそ候え」とあるのみだが、「勸進帳」では「正しき主君を打擲、天罰そら恐ろしく、千鈞を上ぐるそれがし、腕も痺るゝ如く覚え候」とひたすら恐懼するさまがうかがえる。

すなわち、「勸進帳」で弁慶が義経を打つのは「安宅」に由来しているものの、その行為をめぐるドラマは、むしろ「勸進帳」において増幅されている。それはひとつには、「安宅」ではワキにすぎなかった富樫を、弁慶と対峙する主要人物として描き直したことによる。「安宅」の富樫は、義経を「まことの下人」とみなしたから関所を通したのだと、二川氏は解釈する。たしかに「安宅」の富樫は、何ら悩まずに淡々としている。

それに対して「勸進帳」でのこの場面の主眼は、まずは「打つ」弁慶でも「打たれた」義経でもなく、それをじっと見ている富樫がいかに行動するかに置かれる。それゆえ、この場面の富樫には、行為の重さに耐えうるだけの度量の大きさ、人物の深みが求められたのである。

そして、その行為の重さは、やがて再び弁慶や義経の問題として現れることになる。義経が弁慶の行為を責めるどころか、八幡大菩薩の加護とも思うと言ってむしろ感謝するくだりも、「安宅」から「勸進帳」にそのまま受け継がれたものだが、弁慶の反応は「勸進帳」の方が、はるかに具体的で誇張されている。

つまり、「勸進帳」は「安宅」を原型としながらも、「杖で打つ」行為をめぐるのは、さらにドラマがふくらまされていることがわかる。これは能と歌舞伎

の表現方法のちがいにによるものだろう。

3. 「義経記」の記述

「安宅」をはじめ、義経をめぐる物語の多くは、「義経記（ぎけいき）」という室町時代中期（15世紀ごろ）の軍記物語を原典としている。「義経記」では、この行為をどのように描いているであろうか。

弁慶が義経を打つシーンは、安宅関ではなくて如意（にょい）の渡り（富山県）を通る場面に見られる。富樫にあたる人物としては、渡守の平権守（へいごんのかみ）が登場する。その場面を引用しよう。

（『日本古典文学大系 37 義経記』岩波書店、1959年、仮名遣いなど改め、省略したところがある）

〔弁慶は〕腰（こし）なる扇（おうぎ）抜（ぬ）き出（いだ）し、労（いた）わしげもなく、続け打ちに散々にぞ打ちたりける。見る人目もあてられざりけり。

平権守これを見て、「すべて羽黒山伏（はぐろやまぶし）程情（なさけ）なき者はなかりけり。

「判官（ほうがん）にてはなし」と仰せらるれば、さてこそ候わんずるに、あれ程痛わしく情なく打ち給えるこそ、こゝろ憂（う）けれ。詮（せん）ずる所、これは某（それがし）が打ち参らせたる杖（つえ）にてこそ候え。かゝる御労わしき事こそ候わね」

（関所を通り抜けて）

〔弁慶は〕走り寄りて判官の御袂（たもと）に取付きて、声を立てて泣く泣く申しけるは、「何時（いつ）まで君を庇（かば）い参らせんとて、現在の主（しゅう）を打ち奉るぞ。冥顕（みょうけん）の恐（おそれ）もおそろしや。八幡大菩薩も許し給え。浅ましき世の中かな」とて、さしも猛（たけ）き弁慶が伏転（ふしころ）び泣きければ、侍（さぶらい）ども一つところに顔をならべて、消えている様に泣き居たり。

義経「かほどまで果報（かほう）拙（つたな）き義経に、かように心ざし深き面々（めんめん）の、行末（ゆくすえ）までも如何（いかが）と思えば、涙の零（こぼ）るゝぞ」

ここでは「杖」ではなく「扇」で弁慶が義経を打つのだが、それを見た平権守（「勸進帳」の富樫にあたる）は、まるで自分が打った「杖」のようだと感じている。この反応は、「安宅」よりむしろ「勸進帳」

に近い。そして、ここでもまた、主君を「打つ」ことが大それた行動して描かれている。また注目されるのは、弁慶と義経だけでなく、それを取り巻く武士たちについても記述されている点である。他の従者たちも弁慶の苦しみに共感し、涙を流したというのである。弁慶が義経を打った痛ましさは、従者たちにも十分、理解されていたのである。

こうしてみると、「杖で打つ」行為の重大な意味は、すでに室町時代から意識されてはいたが、能「安宅」ではそれを積極的に酌み取ることをせず、歌舞伎「勸進帳」になって、富樫の新たな人物造型を経て、はじめてドラマとして全面的に展開されることになったといえる。

さて、現代の観客は、「勸進帳」で弁慶が義経を打つシーンを見て、どのように感じているだろうか。おそらく、まずは杖で打たれる義経の肉体的苦痛を思いやるだろう。そして主君を打たなければならなかった弁慶の、精神的苦痛に同情するだろう。「杖で打つ」「打たれる」行為は、現代の感覚でも十分、痛々しく感じられる。そして、富樫が義経と知りながらこれを通すのを、弁慶の苦衷を察した富樫のいわば“武士道精神”の発動と解釈する。しかし、このシーンに託された意味は、それだけだろうか。「杖で打つ」「打たれる」という行為の真意は、もっと深いところにあるのではないだろうか。

4. 高木昭作「敵討ちの論理」

このような考えに至ったのは、ひとつの論文に出会ったからである。それは高木昭作氏の「敵討ちの論理」（『歴史評論』617、2001年）である。この論文の中で高木氏は、「杖で打つ」「打たれる」行為を喧嘩ひいては敵討ちを引き起こすに至った要因として取り上げている。これらの事例は、当時の武士の行動原理を知るうえで興味深い事例であり、講義のテーマである「杖で打たれる」ということをめぐる精神史をひもとく重要な鍵となる。まずは、論文に引用された具体例を紹介しよう。

福島正則の敵討ち

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦い直後のことである。福島正則（ふくしままさのり）が、京都にいる息子正之のもとに、佐久間加左衛門（さくまかざえもん）という家臣を使者として派遣した。当時、京都への出入りは厳重をきわめた。加左衛門は稲図書（いな

ずしよ)の番所で番卒に制止されたばかりか、「竹杖にて押しつけられ、少々竹杖にてあてられ候」という目にあわされる。無念に思った加左衛門は、帰って切腹する。

その時に主君の正則に言い残した言葉が、「竹杖にて押し出され、杖あたり申し候、男は罷りならず候、只今私切腹つかまつるべく候、相手、図書殿に候間、あわれ敵御取りくだされ候わば有りがたく存ずべく候」というものであった。加左衛門にとっては、竹杖を当てられたことが、自分の「男」は通らない＝「男」としての面目を失うことになり、切腹せざるをえなかったのである。

加左衛門の切腹を受けて、正則は井伊直政の陣所に赴き、「稲図書首を見申すべし」(稲図書の首を見たい＝稲を処断して殺してほしい)と談判する。この話を直政から聞いた徳川家康はあきれが、結局「大事の前の少事にて、是非におよばず」と決断して図書に腹を切らせ、その首を正則に遣わした。

これを高木氏は、加左衛門の遺言にみるごとく、「相手」のあることがら、つまり喧嘩の話ととらえている。さらに、正則の行動を、家臣と情緒を共有し、「あわれ、敵御取りくだされ」と遺言した家臣の志をそのまま実行に移したものとみる。ただし、と高木氏は続けて、「正則と加左衛門の逸話を以上のように理解するのは、杖を当てられることが、喧嘩によってそそがなければ回復できないほどの恥辱であったこと、が我々に理解できたこととしての話である」とことわっている。この指摘は非常に重要である。杖で打たれることがそれほどの恥辱ならば、「勸進帳」で義経が弁慶に打たれる場面には、我々が想像する以上の切迫した思いが込められていることになる。そこで、近世社会において「杖を当てられる」(杖で打たれる)ことがどのように受けとめられていたのか、高木氏が紹介する具体例に学んでみたい。

「杖を負う」

①萩毛利藩「万治の制法」

毛利藩では万治3(1660)年に、武士・僧侶・百姓・町人などに対して、それぞれが守るべき事柄を全般的に定めた法令を出した。百姓の守るべき作法の一つに次のくだりがある。

一、百姓として直参の諸士に慮外いたすべからず、少々杖を負い候とも堪忍つかまつり、様子これあるにおいては、その首尾、おって郡奉行・

代官に訴えべし、若し相戦かうにおいては、百姓曲事たるべき事、(中略)

付、百姓の喧嘩は、諸士の法には準ずべからず、少々一方疵をこうむるといへども、地下において相済ますべし、(後略)

この法令は百姓と武士(直参とは、ここでは毛利家の直臣のこと)、および百姓どうしの喧嘩について規定したもので、百姓を武士と差別してあつかっていることと、武士には適用された喧嘩両成敗の法が、百姓に対しては適用されない、という点が眼目である。この法令で想定しているのは、武士が百姓を杖で打つ場合である。この時、百姓は喧嘩に訴えてはならず、堪忍しなければならぬ。さらに百姓どうしの喧嘩では、疵を負ったくらいでは、百姓どうしで処理し内済すべきであると言っている。

また、同じく毛利藩の、武士を対象とする寛永10(1633)年頃の法令には、

一、江戸其外にて、公儀衆、御法度仰せ出され候はば、何分にも杖をおい候ても、引けになるまじく候間、堪忍つかまつる可き事

とある。江戸には「公儀衆」(幕府関係者)や諸大名の家臣などがひしめいている。そこで同藩の藩士が喧嘩沙汰におよぶのを懸念して、幕府関係者が相手なら、たとえ「杖をおい候」ても「引け(負け、不面目、名折れ)」にはならないから、喧嘩に訴えることを堪忍せよ、とうたっているのである。

これらの事例から、「杖を負う」＝「杖で打たれる」ことは、すぐに恥辱や名折れに結びつき、喧嘩の原因になりうるものであったことがわかる。だから逆に、当事者の身分や立場のちがいで喧嘩が許されない場合、あるいは喧嘩を阻止したい場合には、杖を負っても恥辱ではない、ゆえに堪忍せよ、という論法が用いられたのである。

「勸進帳」で下人に擬装した義経は、弁慶が振り上げる杖をじっと堪える。あれがまさしく「堪忍」の姿なのである。下人なればこそ、堪えなければならない。そして、堪えるからこそ、下人である＝義経ではない。「杖で打たれる」ことの真意を理解すれば、弁慶のぎりぎりの論法が、より明確に見えてくるであろう。

②高知山内家 大野四郎五郎の事例

もうひとつ、高木氏の論文から事例を紹介しよう。高知山内家の京都留守居(るすい)伊藤源之丞(いとうげんのじょう)の小姓(こしょう)大野四郎五

郎（おおのしろうごろう）は、ある家に使いに出たついでに内裏（御所）で節会を見物していたところ、警備の侍に「頭高きとて、杖にて押さえ」られる。

「杖を当て候儀心外に存候へども」、場所柄といい、主人の使いの途中といい、「あまつさえ喧嘩に及ばん事、不忠の罪のがれがたく」その場は我慢する。その後、ようやく相手の素性をつきとめ、「先頃、かやうの遺恨、御覚え御座有るべし」と言葉をかけて刀を抜き、斬り殺した。

この事件のポイントは、四郎五郎が「杖を当て」られたという事実を、彼自身が沈黙しさえすれば隠蔽できた点にある。警備の侍にとっては、四郎五郎は警備対象の群衆の一人にすぎず、おそらく個人を特定するには至っていない。四郎五郎の知人で彼が「杖を当て」られた現場を見た者はいない。とすると、彼が「杖を当て」られたことを知る者は、彼自身のみということになる。しかも、瞬間的に逆上して喧嘩におよんだのではなく、その場は思いとどまった。にもかかわらず、彼はずっと恨みに思い続け、あらためて復讐したのである。高木氏は、四郎五郎がずっと無念に思い続けたことに対して、「我々には想像のしようもないが、杖を当てられるということは、それほどの意味をもつことだったのである」と述べている。

以上の事例から、少なくとも17世紀の日本では、実際に「杖で打たれた」場合の対処方法は、自身の身分や立場、相手との関係によってさまざまであったが、武士であろうと町人・百姓であろうと、「杖で打たれる」ことが重大な（場合によっては死に至ることもある）恥辱であることは、共通に認識していたと思われる。前述の四郎五郎の事例にうかがえるように、この場合の恥辱は、他人に対する自分の立場の喪失に由来するというよりも、むしろきわめて内省的なものである。武士にとって、「杖で打たれる」ということは、そうした内面の尊厳に関わる重大事であったのである。

あえて「勸進帳」に話を戻すならば、弁慶が義経を打擲した時点で、少なくとも弁慶は死を覚悟したはずである。それは、その後一行が無事に関所を通ろうと通るまいと、関係ないことである。主君に多大なる恥辱を与えておいて、弁慶が生きていられる道理はない。しかし、理詰めで考えるなら、義経の「我を打って助けたのは正八幡の神慮である」という台詞は、結果的に、この状況を打開するための理

屈となっている。すなわち、自分を打ったのが弁慶ではなく、守り神である正八幡大菩薩だと思えば、それは義経にとって少しも恥辱ではない。したがって、義経も、もちろん弁慶も死なずにすむのである。そう解釈すると理に落ちてしまうが、富樫が直面したのは、こうした必死な主従の姿であった。彼が関所を通したのは、弁慶に安易に“感動した”からではない。彼は何よりも、主従が生命を賭けて「杖で打ち」「打たれる」行為の重みを共有したからこそ、自らも覚悟を決めたのだと思われる。

5. 朝鮮通信使殺害事件

ところで、18世紀に起こった朝鮮通信使殺害事件も、この「杖で打たれる」行為が発端のひとつとなっている（このことは高木氏も少しだけ触れている）。この事件については、池内敏氏が『「唐人殺し」の世界』（臨川書店、1999年）で詳しく述べている。池内氏は、日常的な接触のなかで行き違いや誤解などの積み重ねがあつて、日朝間に不信感が生じていたとする。こうした不信感の果てに事件が起こったとすると、原因はそれほど単純ではないかもしれないが、「杖で打たれた」こともそのひとつと考えられる。まずは事件のあらましを紹介し、あわせて「杖で打たれる」ことをめぐる日朝間の受け取り方のちがいに言及してみたい。

宝暦14(1764)年4月、10代将軍徳川家治の襲職を祝う朝鮮通信使が、江戸での儀礼を終えた帰途、大坂で宿泊する。4月6日の夜、対馬藩通詞（つうじ）の鈴木伝蔵（すずきでんぞう）が、通信使の宿舎に侵入し、通信使中官の崔天宗を槍の先で殺害して逃走した。事件の経緯には不明確な部分もあるが、日本側が調べたところでは、おおよそ次の通りであった。4月6日、通信使の下官が船に忘れた鏡を取りに帰ったところ、見当たらないので、日本人の加子が盗んだのだらうと言い出し、それをめぐって下官と加子とが言い争いになった。それに関連して、下官に肩入れする通信使中官の崔天宗と、日本人加子の弁護をする対馬藩通詞の鈴木伝蔵とが口論になり、立腹した崔天宗が衆人環視のもと、持っていた杖で伝蔵をさんざんに打擲した。そこで伝蔵は夜になってから寝間に忍び込み、崔天宗を刺殺した。伝蔵は探索の結果、4月18日に捕縛され、5月2日に処刑される。

この事件で伝蔵は、自己を正当化するために、次

の二点を主張している。ひとつは、朝鮮人が衆人環視のなかで伝蔵を杖でさんざんに打擲したこと。もうひとつは、対馬藩ではかねてから藩主より仰せ付けられた「掟」があり、それを熟知している人々の面前で打擲を受けたので、やむをえず崔天宗を殺害したという点である。

はたして崔天宗が伝蔵を杖で打擲したという事実があったのか、なかったのか。これは事件の原因を究明するうえで、当初から問題にされた点であった。しかし、幕府は結果的に、その事実の有無を判定できなかった。対馬藩の「掟」についても、幕府は対馬藩の通詞および通詞下知役に「掟」の有無を質したが、その存在は確かめられなかった。しかし、たとえ虚偽の供述であったとしても、その内容は注目される。その「掟」とは、「朝鮮人が道理もなく対馬藩士を打擲した場合にはこれを討ち捨てて、いったん立退いたうえで国元へ戻ってくるようにせよ。もし打擲されながらそのまま放置したならば国元へ立ち入ることは許さない」というものであった。

また、前・対馬藩主宗義蕃は、この事件の非は朝鮮側にある、なぜなら「日本人を打擲するという法外な行為を行ったところから刃傷沙汰になったわけだから、まずもって崔天宗こそが国禁を犯した罪人である」「朝鮮国では人を打擲することを尋常な行為と心得ており、また打擲された方もさしたる恥辱だとも思わない」「日本の風習では、踏み蹴り、唾を掛け、あるいは打擲など、恥をかかされたときには決して容赦しない」と主張したというのである。

こうしてみると、「杖で打たれる」ことをめぐる日本と朝鮮の感覚のちがいが、この事件の発端にあった可能性も否定できない。少なくとも、伝蔵がみずからの正当性を主張するなかで、打擲のことで「掟」を持ち出したことは、注目に値する。では、「杖で打たれる」ことをめぐって、本当に日本と朝鮮とで感覚がちがうのだろうか。この問いに答えるには、当時の朝鮮における「杖で打たれる」行為をめぐる感覚を明らかにしなければならない。今回は残念ながら問題提起にとどめ、ここで話を終えたい。もしも手がかりがあるならば、今後、朝鮮史における課題として、研究されることを望んでいる。

それと同時に、こうした身体をめぐる感覚は、同じ日本とはいえ、現代の我々にもはや通じないことを確認しておかなければならない。その実例を最後に紹介しよう。

6. 黒澤明「虎の尾を踏む男達」

映画監督・黒澤明といえば、代表作「七人の侍」などで世界的に有名であるが、その黒澤明が「勸進帳」をもとに1945年に撮ったのが、「虎の尾を踏む男達」という作品である。(黒澤明『蝦蟇の油』岩波書店、1990年) この作品は偶然にも、日本という国家が重大な局面を迎えていた時期に撮られた映画ということになるが、それはともかく、基本的に「勸進帳」の構成をそのまま活かすかわら、喜劇役者として人気を得ていた通称エノケンこと榎本健一を迎え、「勸進帳」にはない強力な役で登場させるなど、魅力に富む作品である。ここでは講義の最初にあげた「勸進帳」の後半部分のクライマックスシーン、①弁慶が義経を杖で打つを見た富樫が、眼前の人物が義経であることを承知しながら関所を通す場面、②無事に関所を通過したのち、主君を打った申し訳なさになだれる弁慶へ、義経が優しく声をかける場面が、それぞれ映画ではどのように描かれているかを確認しておきたい。なお、脚本は黒澤明自身が書いている。

富樫の言葉

弁慶(大河内伝次郎)が義経(岩井半四郎)を打つを見た富樫(藤田進)は、しばし瞑目したのち、静かに目を開け、「もしこの強力が判官殿ならば、杖を以て打たれることはよもあるまい」と口にする。そしてなおも、あれは義経ではないか、と色めき立つ梶原景時の家来(「勸進帳」にはない人物だが、映画では義経を追及する悪役として登場)の前に、きっぱりと、「おのれの主を杖を以て打つ家来があるはずがござらん」と言い放つ。

この台詞は、以下の論法で成り立っている。おのれの主君を杖で打つ家来があるはずがない(もちろん、「杖で打たれる」ことは死を招くほどの屈辱的行為だから、家来が主君を打つなどありえない)。だから杖で打たれている者は弁慶の主君(義経)ではない、これは義経一行ではない、というのである。まさしく「杖で打つ」行為の真意をとらえた言葉であり、それこそ弁慶の意図の核心をとらえたものである。富樫は弁慶のぎりぎりの論法を真正面から受けとめ、それをみずからの言葉として表現してみせたのである。

この富樫が重大な決意をするシーンは、先述したように「安宅」では強調されない。富樫は淡々と「近

頃誤り申して候、はやはおん通り候え」と言うのみである。「勸進帳」では富樫は、「判官どのにもなき人を、疑えばこそ、かく折檻も仕給うなれ」（義経ではない人を私が疑うからこそ、このように折檻をなさるのだろう）と、やや憂いを含みながら言い、目を閉じて一瞬、覚悟を見せる。富樫の心のありようは、どちらかといえば言葉よりも仕草で表現される。それに対して、映画での富樫は、「杖で打つ」行為の真意をはっきりと言葉でとらえ、「勸進帳」以上に非常な重みをもって、自分の覚悟を示している。この重々しさの前に、景時の家来は思わず追求の手をゆるめてしまうのである。もしも、富樫の言葉の真意を理解したうえでこのシーンを見るならば、富樫の苦渋に満ちた心の動きを思い合わせて、より謹厳な気持ちになるはずである。このシーンの最後は、富樫を万感の思いでじっと見つめる弁慶のアップで終わる。

義経の従者たちの反応

さて、まさに“虎の尾を踏む”心地しながらも、義経一行は富樫のはからいによって、やっとのことで窮地を脱する。しかし、無事を喜ぶかと思いきや、「義経記」には「（弁慶は）走り寄りて判官の御袂に取付きて、声を立てて泣く泣く申しける」「さしも猛き弁慶が伏転び泣きければ、侍ども一つところに顔をならべて、消えいる様に泣き居たり」とある。弁慶はもちろん、他の従者たちも泣いている。関所を無事に通った喜びよりも、義経が杖で打たれたという暗い事実が、一行を支配しているのである。「勸進帳」でも、平伏して義経に赦しを請う弁慶のかたわらで、他の従者一同も神妙な顔をして控えている。「杖で打たれる」ことは、死をも意味する重大な屈辱である。そうと知るならば、主君である義経が杖で打たれたことは、弁慶と義経の当事者どうしの問題だけでなく、同行している従者にとっても、そして見る者にとっても、重い行為としてのしかかってきたはずである。

ところが、映画ではこのシーンは驚くべきことに、
「や～れやれ、もうここまで来りゃあ大丈夫でさあ」
という強力（エノケン）のセリフとともに、従者たちの笑い声で始まる。彼らは明るく口々に、
「武蔵〔弁慶のこと〕がいきなり金剛杖を振り上げた時には、さすがに驚いたなあ」

「アハハハ」
「武蔵坊ならでは思いもよらぬ機転じゃ」と言い合い、それにエノケンが
「えっ？あっそうか。おいらまた気でも狂ったのかと思ったい。ヒヒ、このカボチャめ」と自分の頭をなぐって応じると、またひとしきり
「ハハハハハハ」
「ヒヒヒヒヒ」
と一斉に笑い合うのである。

そこへ突然、弁慶が義経の前にバタリと手をつき、ふりしぼるように「もったいなや。計略とは申しながら…」と、非礼を詫びはじめると、そこではじめて他の従者たちも神妙な顔つきになって、歌舞伎と同じような雰囲気に戻る。しかし、そこに至るまでに、弁慶ひとりが事の重大さに気付き、他の従者たちは一向に頓着する気配がないというのは、近世の常識では考えられない。また、歌舞伎であれば、関所を脱したのちは厳粛な悔悟と赦しの場面になるはずなのが、いきなり従者たちの笑いによってその雰囲気が破られてしまうのは、何とも違和感がある。

もともと黒澤のねらいは喜劇役者エノケンを登場させ、その違和感を作り出すことにあったのかもしれないが、この場面ではさほどエノケンが効果的に使われているとは思われない。ともかく、結果的に「杖で打たれる」ことの意味が忘却されていることに変わりはない。

すなわち、今から約60年前に「勸進帳」を題材に作成された黒澤明の映画では、「杖で打つ」行為をめぐる、富樫には事態の本質に迫る台詞を与えながら、従者には不可解な行動をさせているという、ちぐはぐな処理がなされている。それが、監督の意図であろうとなかろうといずれにしても、「杖で打たれる」行為をめぐる精神史における、20世紀の限界だった。

7. おわりに

近世の日本では「杖で打たれる」こと（とくに武士が打たれること）の重みが、人々の共通認識としてあった。しかし、すでに1945年の段階でその感覚を理解することは難しくなっており、歌舞伎「勸進帳」は名作として人気が高いにもかかわらず、弁慶が義経を打つ行為の真意は、今日では近世の人々と同様の感覚ではとらえられなくなっている。

つまり、18世紀の同時代人である日本人と朝鮮人

との間にあったかもしれない感覚のちがいが、18世紀の日本人と20世紀(21世紀)の我々の間にもあるのである。あるいは、後者の感覚のちがいのほうが大きいかもしれない。ということは、見方を変えるならば、我々も18世紀の日本と距離を置いてみることで、朝鮮を含む東アジア地域の中で、日本という存在を相対化してみることができるかもしれない。そこに、日韓両国の社会や文化を相互に比較する意味が見出せるのではないだろうか。

今後の課題として、日本で「杖で打たれる」こと

が精神的に重い意味をもちはじめたのはいつごろかということ、こうした行為に対する特別な感覚は、はたして日本だけのものだったのか(本当に朝鮮ではなかったのか)という点をあげたい。日本だけでなく韓国でも、この問題について考えていただければ幸いである。また他の東アジア地域において、たとえば中国や琉球などで、「杖で打たれる」行為をめぐる特別な感覚があったのか、なかったのか、明らかにされれば非常に面白いと思う。

◇ 質疑応答

フロアー(お茶): 武士が杖で打たれるということは、切腹をするか、あるいは相手を討つほどの選択を迫られるだけの、精神的な重みをかけられるということですが、では杖で打つ方には、それだけの覚悟があったのでしょうか。

報告者: 自分が殺されるかもしれないと?

フロアー(お茶): ええ、打つことによって何らかの状況を想定して、ということはあったのでしょうか。

報告者: そうですね。ちょっと資料が少なく、打った方がどういう気持ちで打ったのかというのは、今のところわからないんですけど、高木昭作さんの紹介されている事例を見ると、打つほうは警護している存在なんですね。守っているところに入って来る侵入者に対して打っているの、それなりに正当性があると思っていたのじゃないかと思えます。番をしているところに入って来たから打つ、と、だから打つ方は自分も正しいと思っているし、打たれる方は何があっても、打たれることは恥辱だ、と考える。今のところそれしか。

フロアー(淑明): 一つは天保11年にこれが歌舞伎化されたというのは、時代的背景があるかどうかということ、もう一つは、相手が自分より上なら我慢すること、日本の場合なら、百姓だったら武士にたたかれても我慢するということですね。杖で打たれるということは朝鮮時代の場合、百姓が身分の高いものから打たれるということは結構あったと思えます。もう一つは韓国の軍隊は、いえ軍隊の話だけでなく、高校時代から、いっぱい叩かれるんですね、先生に。そういうことは戦前の日本社会にもあったんじゃないかと思うんですけど、丸山昌男も軍隊でいっぱい叩かれたというから。そういう点とどういう関係があるかという点を聞きたいです。

報告者: まず第一点、天保11年の時代背景ですが、時代というより、七代目市川團十郎という人が、家の芸を作ろうとしたときに、この「勸進帳」を作ったことです。当時、能というのが、歌舞伎よりも上位の芸能としてあったので、「勸進帳」を「安宅」によく似せて作ったんです。だから時代というよりは、七代目市川團十郎が考えたことの一つだったということです。

二番目の質問に関しては、身分が違えば問題はないです。明治になって武士はいなくなるわけですね、身分も変わってきます。「打たれる」ということが、その時にどうなるのか、そういう問題があると思います。軍隊や、学校でよく叩かれたというのは、そのこととはちょっと違うように思います。

フロアー(淑明): もし、叩かれたら必ず復讐するという伝統が、近代まで続いていたら、毎日殺されるでしょう。それはちょっと違うんじゃないかと思う。

報告者: 軍隊は、上官が部下を叩くわけで、そこに身分の差がある。学校でも先生が生徒を叩くのは構わないわけなんですね。

フロアー(淑明): それで、近世の伝統とつながりがあるかどうか。

報告者: それらは、むしろ刑罰の、罰のほうだともいえますね。

フロアー(淑明): ここで扱っているのは、刑罰とは違うんですね。

報告者: 違うように思うんですね。刑罰は刑罰であったんだけれども、違うように思えます。こういう恥とすることが明治まで続くのかどうか、今、勉強の途中なのですが、だから現代の我々にはあまり理解できないものがあるように思えます。

司会: 私は、簡単なことをちょっと聞きたいんですけど、特に杖の問題ですか、名誉の問題だったら、韓国だったら、杖よりは、こうするのが、(手で頬をたたくポーズ) 名誉の問題になりますね。先生は、杖ですか?

報告者: 杖というのが、よく出てきますね。

司会: 出ていますか。もし他に何か。

報告者: 村の世界でもよくあることです。村の場合は百姓同士が叩くんですね。武器はわからないですけど、打擲ということばが出てくる。誰かが誰かを打擲した、と出てきます。杖かどうかはわかりません。その場合は死んだりはしません。死んだりはいないけれども、誰かに叩かれたということがよく史料に出てくるということは、やはり悔しいと、復讐ということも思っていたのだらうと思います。そうですね、手で叩くのか、杖なのか。

司会：格下の人から何らかの形で叩かれたら、不名誉ですか。

報告者：叩かれたら不名誉。

司会：杖とか、形のことじゃなくて、名誉の問題ですか。

フロアー（淑明）：（通訳にて）西洋の場合は、決闘を申し込むときに、手袋を投げるという場面があると思うんですけど、杖で叩くということには、そういう意味合いもあるんですか？

報告者：決闘は戦おうと思って手袋を投げるんですね。この場合は、叩いたことそのものが原因になっているので、ちょっと違うかなと思います。これから喧嘩しようと思って叩くというよりは、思わず叩いたことが喧嘩の原因となるということだと思います。

フロアー（淑明）：最後に今後の課題として、今、発表でおっしゃったような、杖で打たれるということがどのような意味をもつのかということに関係した質問なんですけど、「勸進帳」自体は天保11年、1840年のものですが、この内容の話は、鎌倉時代ですので、1200年前後の話になるじゃないですか。記録で弁慶が主人の義経を叩いて危機を救ったとっていること自体はありますか？

報告者：今日紹介した1400年代に書かれた「義経記」、これが今のところは最初です。ここに出てきます。ただ、この時は扇なんですけど、見ていた人が杖のような、と言っているんですね。

フロアー（淑明）：これは、まったくのフィクションでしょうか？

報告者：これはフィクションだと思いますね。フィクションとして作られている。ただ、フィクションとして読んでわかるということは、この当時にはもう認識があったんだと思いますね。

司会：名誉が侵害された場合、それをどのように解決するかということですね。殺されるか。

報告者：そうですね。相手を殺して、自分も死ぬという。逆に杖で打つということでもなく、朝鮮時代に名誉を傷つけられたり、殴られたりしたときに、相手を殺さなければならぬということがあるのかどうか。日本の場合は、武士の支配する世界なので、ちょっと文化が違うんです。

司会：面白い質問ですね。両班の世界では、名誉の問題は大事でしょうけど、殺しますか？

フロアー（お茶）：今、両班の話で思ったのは、例えば両班にとって、髪を切られた場合は、名誉としても家柄の問題としても、ものすごく恥となるもので、これは重みがあったと思うんですけど。

司会：それは日本との文化的な差ですね。

フロアー（お茶）：恥という面で、死ななければならないほどの重みがある恥というのは、例えば両班にとってはそういう問題ですね。

報告者：その時は、相手をどうする？髪を切った相手を殺す？

フロアー（お茶）：両班は戦うことは。

フロアー（淑明）：殺す手段がありません。

報告者：相手の髪を切るということも無い？つまり、この

話のもう一つの背景は、喧嘩両成敗ということなんです。やられたら同じことをやりかえすという話なんです。それは無いですか？自分だけが死ぬ？

フロアー（数名）：死なない。

フロアー（淑明）：死ぬほどの重みがある。

フロアー（淑明）：私のほうは、比較しながら考えていたんですけど、「勸進帳」なんかは、結局は杖をもって、自分の主人を打つというようなふりをして人を感動させる、そういう内容なんです。杖というものに、ポイントをあてているのか、自分の主人を打つということにポイントがあるのか、それを私は、今よくわからないんですけどね。私の記憶では、杖で打つような行為をする弁慶が感動させる、漢字は何も書いてないのに杖のような、そういう要素がいろいろあって、聴衆を感動させるわけなんです。

報告者：そうですね、そうですね。確かに「勸進帳」という芝居は、今、先生がおっしゃったようになってます。ご存じない方のために説明しますと、この前にも、もうひとつクライマックスシーンがあって、それは勸進帳という名前の由来でもあるんですけど、富樫が弁慶に山伏なら勸進帳をもっているだろう、勸進帳を読めというんですね。ところが弁慶は偽者の山伏なので、勸進帳を持っていないんです。本当は、勸進帳を持っていないんだけど、勸進帳のふりをして、何も書いていない紙を何かが書いてあるように読むわけです。そこで第一関門をパスするわけですけども、そのあと、また山伏問答というのがあって、富樫が質問する、弁慶が答える、富樫が質問する、弁慶が答える、というやりとりが何回かあります。それがあって、富樫が、なるほど山伏だといって、一度通そうとすると、先のように、誰か（番卒）が、そこに義経に似た人がいるということで、また止めて、さっきのシーンになるわけですね。劇としては積み重ねがあって、最後、ここで打ち殺すぞ、というところで止められて通してもらおうという流れがあるので、そうですね、確かに杖で打つということにポイントがある芝居ではありません。ただ、ぎりぎりのところで最後に選んだ手段が杖で打つということだった。つまり勸進帳のところは、まだそれほど緊迫していない、最後に絶体絶命になる前のちょっとした緊張なんです。だから劇を作るときに、本当のクライマックスの前に、ちょっとしたクライマックスを入れておくという、そういうのが勸進帳のシーンで、本当のクライマックスはあそこじゃないか、と思うんです。ただ杖である必要はないと思う。

フロアー（淑明）：例えば手を使う、身体を使って人を殴るということ、道具を使って人を殴る。殴る方は二つしかないんです。

司会：それで、どこを殴るかという。

フロアー（淑明）：身体を使うのと、道具をつかう。杖というのは、道具で人を殴るという行為の、ある意味では、象徴的なものです。私は古代史をやっているんで、日本書紀の推古朝をみるとね、孫が祖父を杖で殴るといふ事件がおこったりする。だいたい杖というのが、

海外大学院とのジョイント教育 日本学共同ゼミ
研究報告 「日本の文化と社会」

杖という意味よりは、道具という意味が強い。道具で人を殴るというのと、身体を使って人を殴るという、その違いをちょっと、そういう視点で。 **報告者**：ちょっと象徴させているのかもしれませんがね。杖というのは。

かんだ ゆつき／お茶の水女子大学文教育学部 助教授